抗菌性物質残留事故防止に向けて

　生乳中への抗菌性物質の残留事例は年々減少傾向にありますが、全道では年間数十例の発生が見られます。生乳への抗菌性物質混入は健康被害の原因になるとともに、酪農場にとっても重大な損失を招きます。抗菌性物質を投与した牛を間違えて搾乳しないように、予防策を確認しておきましょう。

１．抗菌性物質の残留事例発生状況

・令和４年度は全道で 38 件発生（宗谷管内は１件）

・特に７～９月に多い傾向にあるが、一年を通して発生が見られる（図１）。

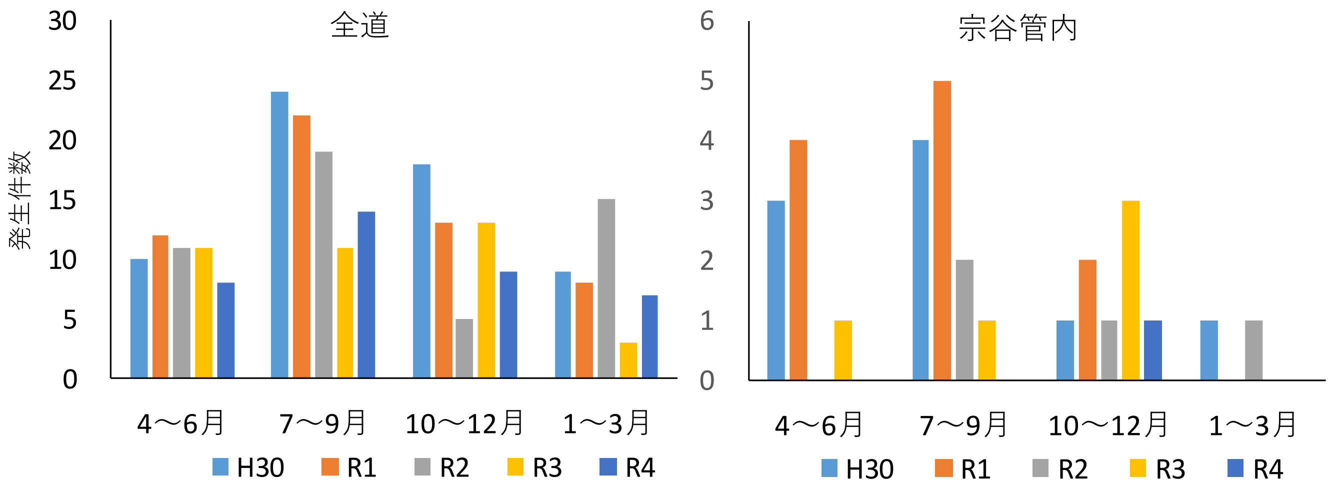

図１　四半期毎の生乳における抗菌性物質の残留事例発生件数

２．発生原因

　令和４年度の 38 件の内訳は、誤搾乳が 24 件、誤投薬が７件、その他が７件となっています。一番多かった誤搾乳の詳細な原因を調べると、スプレーが薄くなることなどによるマーキングの見落としが 17 件と多い状況でした（図２）。

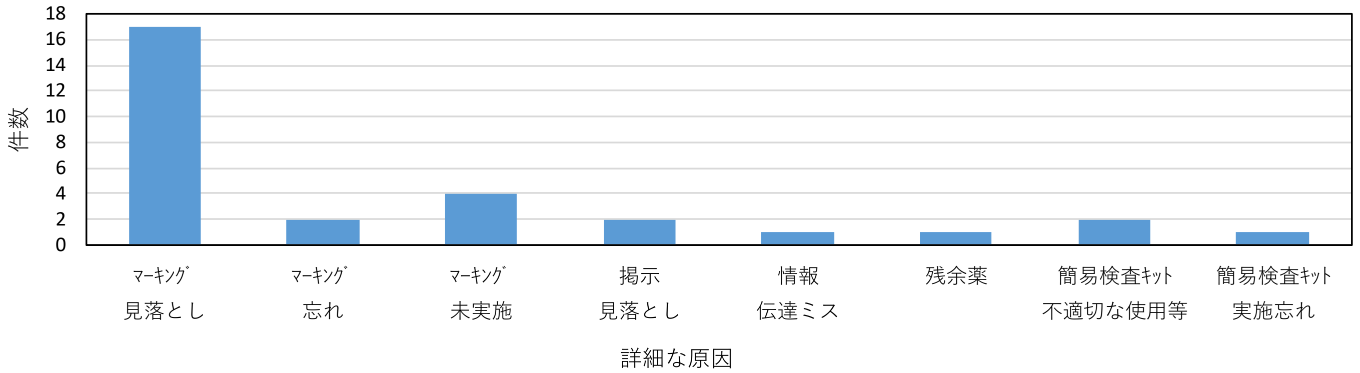

図２　誤搾乳の詳細な原因（複数原因の事例含む）

3．防止対策

（1）マーキング

⑴マーキングは2カ所以上実施しましょう（図3）。

⑵スプレーによるマーキングの場合、薄くなったら再度マーキングしましょう。

図3　マーキングの例

（2）情報共有

抗菌性物質投与牛の搾乳に係る情報は、ミーティング時やホワイトボードなどで毎日意識的に確認するようにしましょう。視覚に訴えると効果的です（写真1，2）。

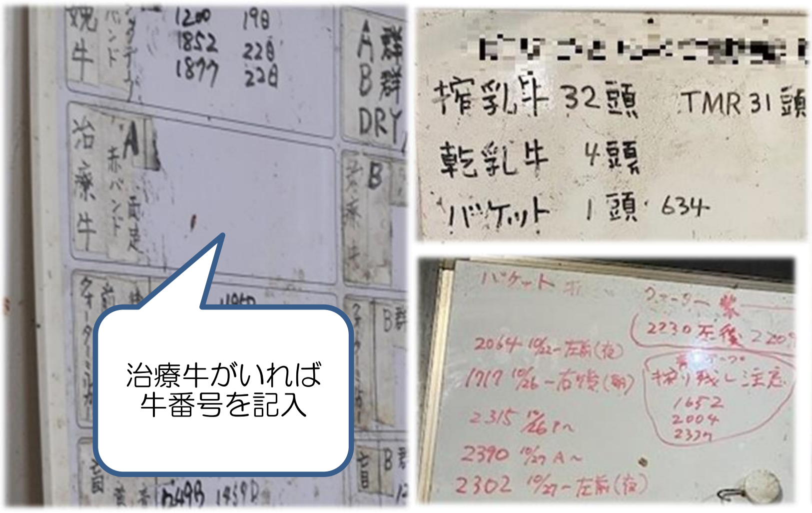

写真1　治療牛等の情報共有例

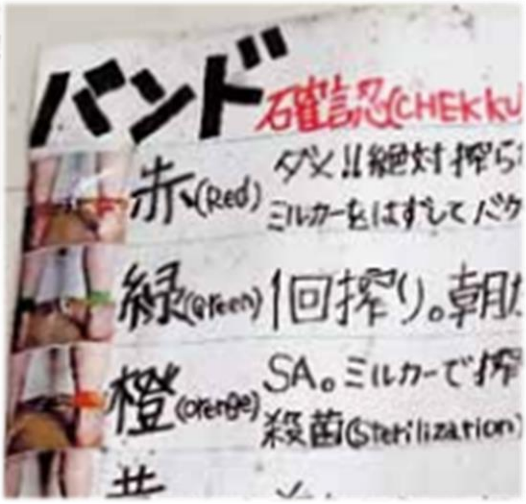

写真2　足バンドの情報共有例
（令和3年営農改善資料、根室農改）

＊最後に

宗谷管内の抗菌性物質残留事例は令和4年度は1件と少なかったですが、令和5年度は12月までで3件発生しています。春から発生が増加する傾向にありますので、ほ場作業が始まる前に農場の作業者同士で話し合い、マーキングや情報共有の仕方を確認しておきましょう。

（作成：令和6年1月　宗谷農業改良普及センター）